

宮本輝

錦きん
繡しゅう



錦繡

宮本輝

新潮社

錦きん
繡しゅう

定価一〇〇〇円

一九八二年三月二〇日発行
一九八二年六月十五日五刷

著者 宮本 輝みやもと てる

発行者 佐藤 亮一さとう りょういち

発行所 株式会社 新潮社



東京都新宿区矢来町七十一番地
電話 東京 (266) 五一一一 (業務)
東京 (266) 五四一一 (編集)
振替 東京 四八〇八 千一六二
印刷 株式会社 金羊社
製本 神田加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

錦

繡

前略

蔵王のダリア園から、ドッコ沼へ登る Gondola・リフトの中で、まさかあなたと再会するなんて、本当に想像すら出来ないことでした。私は驚きのあまり、ドッコ沼の降り口に辿り着くまでの二十分間、言葉を忘れてしまったような状態になったくらいでございます。

あなたに、こうしてお手紙を差し上げるなんて、思い返してみれば、それこそ十二、三年振りのことになりましたか。もう二度と、あなたとはお目にかかることはないと思っておりますのに、はからずもあのような形で再会し、すっかりお変わりになってしまったお顔立ちや目の光やらを拝見して、私は迷いに迷い、考えに考え抜いて、とうとう思いつくすべての方法を講じて、あなたの御住所を調べ、このような手紙を投函することになってしまいました。私の我儘を、こらえ性のない相変わらざる性格をどうかお笑い下さい。

あの日、私は急に思い立って、上野駅からつばさ三号に乘りました。子供に、蔵王の山頂から星を見せてやりたいと思ったからです。（息子は清高という名で、八歳になりました）リフトの中で、たぶんお気づきになったことですが、清高は生まれつきの障害児で、下半身

が不自由であるだけでなく、同じ八歳の子供と比べると二、三歳知能が遅れています。どういわけか星を見るのが好きで、空気の澄んだ晴れた夜には、香櫨園の家の中庭に出て、何時間でも飽きずに夜空を眺めているほどです。父の青山のマンションに二泊して、あす西宮の香櫨園に帰るといふ晩、何気なく一冊の雑誌を手に取りますと、蔵王の山頂から撮影したという夜空の写真が目に入りました。あつと息を呑むほどの満天の星で、私は生まれてこのかた殆ど遠出などしたことのない清高に、何とか実際にこの星を見せてやれないものかと思ってしまうのです。

父はことし七十歳になりましたが、まだ矍鑠と毎日会社に顔を出し、そのうえ、月の半分は東京支社で指揮を取るため、あなたも御存知の、あの青山のマンションで東京住まいをつづけています。ただ、十年前と比べると、髪はすっかり白くなり、幾分猫背にもなったように感じますが、香櫨園での生活と青山でのマンション住まいをちようど半分ずつの割合で元気にこなしています。ところが十月の初め頃だったでしょうか、会社からのお迎えの車が来て、マンションの前の石段を降りる際、踏み外して足首をひどく捩ってしまいました。ほんの少しですが骨にひびが入り、内出血もひどくて、まったく歩けない状態で、そのため私は清高をつれて慌てて新幹線で駆けつけました。動けないとなると途端に癩癩を起こして、お手伝いの育子さんの世話の焼き方が気に入らなくなり、電話で私を呼びつけたのです。少し長びくのではないかと考えて、仕方なく清高をつれて来たのですが、怪我といっても足首の捻挫で、それほどたい

したこともなく、父も私や孫の顔を見ると苛立ちもおさまって、今度は香櫨園の家の方が気になるのか、早く帰ってやれなどと勝手なことを言いだしました。その我儘勝手ぶりに呆れるやら可笑しいやらで、私は育子さんと秘書の岡部さんにあとをお頼みして、香櫨園の家に帰るために、息子と一緒に東京駅まで来て、そこでまた蔵王の観光ボスターを見たのです。ちょうど紅葉の季節らしく、大きな写真いっぱい、色とりどりの樹木が枝を拡げていました。蔵王といえは冬の樹木ぐらいいしか知らない私は、東京駅のコンコースに立ち停まって、やがて無数の氷と化してしまうであろう樹木たちが、いま鮮やかに色変わりして、満天の星空の下で風になびいているさまを想像してみたのです。私はなぜか矢も楯もたまらず、体の不自由な自分の息子に、清涼な山のたたずまいやたくさんの方々を見せたいと目を輝かせてねだりました。そのことを清高に言うと、清高も嬉しそうに、行きたい行きたいと目を輝かせてねだりました。それで、私たち親子にはちょっとした冒険だと思われましたが、駅の中にある旅行代理店に行って、山形までの切符と蔵王温泉の旅館の予約、それに仙台から大阪空港までの帰りの飛行機の座席を頼んだのです。ところが飛行機は満席で、切符を取るためには予定を変更して蔵王か仙台でもう一泊しなければなりませんでした。私は蔵王で二泊することに決め、上野駅に向かいました。もし蔵王を一泊で切り上げていたら、あなたとお逢いすることもなかったでしょう。いま私には、それがとても不思議なことのように思われてなりません。

山形は曇り空でした。山形駅から蔵王温泉に向かうタクシーの中で、私は空を眺めながら

っかりした気持で坐り込んでいました。そしてふと、東北を訪れるのはこれで二度目であることに気づきました。あなたとの新婚旅行で、秋田の田沢湖から十和田に向かったことを思い出していました。その夜は、溢れた湯が疎水のように街並の淵を流れて、強い硫黄の匂いにむせかえっている温泉場の旅館で一泊しました。雲が夜空を覆って、月も星のかけらも見えない夜でしたが、山の空気がすがすがしく、初めての親子ふたりの旅ということもあって、心が浮き立つ思いでございました。翌日は朝からよく晴れて、清高は松葉杖をかかえて、いつときも早くリフト乗り場に行きたい様子で、私たちは朝食をとってから、休む間もなくダリア園のゴンドラ・リフトの乗り場に向かったのです。山形という遠い地の、それも蔵王の中腹の、巡り巡っている無数のゴンドラの一台に、同時にあなたと乗り合わすはめになるなんて、考えただけでも心が冷たくなるような偶然ではないでしょうか。

ゴンドラに乘ろうとする人が数組順番を待っていました。二、三分もすると私たちの番になりました。係り員がゴンドラの扉を開き、松葉杖をついた清高を抱きあげて中に入れてくれ、つづいて私が乗り込んだとき、もうひとり乗ってもらいますからと言う係り員の声が聞こえ、薄茶色のコートを着た男の人が狭いゴンドラの中の私たちと向かい合った席につきました。扉がしまつて、ゆらりと動き出した瞬間、私はそれがあなたであることに気づきました。あの時の驚きを、いったいどう表現したらいいのでしょうか。その時、あなたはまだ私に気づかず、コートの衿を立てて、その中に顎を埋めるような格好で景色に見入っていらっしかったです。

あなたがそうやってぼんやりとガラス窓越しに視線を投げていらっしゃる間中、私は瞬きひとつせず、あなたのお顔を見つめつづけていました。私は見事な紅葉を見たくてゴンドラに乗り込んだのに、片時も樹林に目を移すことなく、目前のひとりの男性を凝視しつづけていたのでございました。私は、ほんのつかのまに何度も、本当にこの人はかつての私の夫だった有馬靖明さんであろうかと自問自答いたしました。間違ひなく有馬靖明さんであるなら、どうしてこの山形の、蔵王のゴンドラなどに乗っているのだらうかとも思いました。それはあまりの偶然に對する驚きだけではなく、十年振りに再会したあなたのお姿が、私の心に焼きついている思い出の中のお姿とあまりにもかけ離れていたからでした。十年……。当時二十五歳だった私も三十五になりましたが、あなたとて三十七歳におなりの筈で、歲月による面変わりが、いよいよ目立ち始める年齢を、お互いが迎えてしまったわけでございます。けれども、それにいたしましても、あなたのお変わり様は尋常ではなく、私はあなたが決して平安な日々をお暮らしないことを直感してしまいました。どうかお気を悪くなさらないで下さいませ。私はいま、何の為にこんな手紙を書いているのか、自分でもよくわからないのです。ただありのままに、自分の気持を綴ること、たぶんもう二度と差し上げることもない私からの一方的な手紙を書き終えるつもりでございます。しかも私は、こうやって書いておりましても、実際にあなた宛にポストに投函するかどうか、迷いつづけているのです。

あなたはやがて何気なく私に視線を向け、そのまま再び目を窓外の景色に移してから、愕然

と目を見睜いて私を見つめ直しました。そうやって随分長い間、私たちはお互いの顔を見つめ合っていたようでございます。私は何か言わなければならないと思うのですが、言葉が出て来ませんでした。それでも私はやつの思いで、お久し振りでございますと申しました。「ほんとにお久し振りでです」。あなたはそう仰言つてから、ひどくぼんやりしたお顔を清高に向け、「お子さんですか」とお訊きになりました。私は震えそうになる声で、はいと答えるのが精一杯でした。ゴンドラの両脇のガラス窓越しに、真紅の葉叢が流れ過ぎて行くのが、私の目に虚ろに映っていました。私はこれまで何度、清高のことを、人から「お子さんですか」と訊かれたことでしょうか。もっと小さいときは、肢体の不自由なあきらかに知恵遅れとわかる顔つきでしたから、ある人はあからさまに気の毒そうな表情でそう言い、ある人はわざと無表情を装って訊いてくるのでした。私はそのたびに、体のあちこちに力を込めて、あえてまっすぐに相手の目を見つめながら、昂然と、はいと答えてきました。けれども、私はあなたから「お子さんですか」と訊かれたとき、かつて一度も味わったことのないような恥しさに包まれて、ためらいながら、小さく返事をしていました。

ゴンドラは、ドッコ沼の降り口に向かつてゆっくり昇っていました。遠くに朝日連峰が見え始め、眼下の山ふところでは、温泉町の建物の屋根が小さく光っていました。温泉町からぼつんと離れた別の山並の斜面に建っているホテルの赤い屋根が、樹木の途切れめから見え隠れして、それが一瞬なぜか私に、鎌倉時代の絵巻物に描かれている地獄の炎を連想させたことを、

いまでもはっきりと覚えています。どうして、そんなものを私は連想してしまったのでございましょう。たぶん、私はゴンドラに揺られている間、動揺と緊張で、少しばかり異常な精神状態に陥っていたのでしょう。ですから、あのゴンドラの中の二十分もの間に、私はあなたともっといろいろなことをお話し出来た筈でしたが、ただ黙りこくって、早く降り口に到着しないものかと、ただもうそればかり考えておりました。それは、あなたとお別れしたあの十年前とまったく同じ形でした。私たちは、離婚するにあたって、もっともとお互いの気持を話し合う必要があった筈でしたのに、そうはいたしませんでした。十年前、私は頑なにあの事件に関する説明を求めようとはいたしませんでしたし、あなたも意地みために口を閉ざして、ひとことたりとも弁解しようとはなさいませんでした。二十五歳の私は、あのときどうしても優しく寛容にはなれませんでしたし、二十七歳のあなたは御自分をあれ以上卑屈に出来なかったのをごいましょう。樹木の繁りが深くなり、それが陽の光をさえぎってゴンドラの中を暗くさせたとき、あなたが、向かい合って坐っている私の肩口あたりからそのまま前方を見つめて「着きましたね」と呟きました。その瞬間、あなたの首の右側の傷跡が見えました。ああ、あのときのお怪我の跡なのだと私は思い、慌てて目をそらせました。汚れた灰色の発着場に降り、ドッコ沼への曲がりくねった道に立って、あなたは「それじゃあ」と小さく礼をしてそれから足早に去って行ってしまわれました。

私はこの手紙を、出来る限り正直に書くことにいたしました。私はあなたのお姿が消えた

あと、しばらくじっとそこに立ちつくしておりましたが、それでも永遠に、あなたとお別れしてしまつたように思えて、泣きだしたくなるのをこらえつづけていました。どうしてそんな気持ちに襲われたのか、私には自分の心がよくわかりません。ですが、私は突然、あなたのあとを追いかけて行きたくなりました。あなたがいまだうやってお暮らしなのか、私と別れてからの十年間、どうやってお過ごしになつて来たのか、たまらなく訊いてみたい思いに駆られたのでございます。もし清高が一緒でなかったら、あるいはそうしていたかも知れません。

私は、清高の歩調に合わせて、ゆっくりゆっくりドッコ沼への道を歩き始めました。枯れかけたコスモスの破れた花びらが、涼やかな風になびいていました。普通の子供が十分で歩いて行ける距離が、清高には三十分もかかっています。それでも以前と比べると、うんと歩けるようになったくらいで、ああしたい、こうしたいという意欲を、実際の行動として表わせるようになったのは、ほんの二年程前からでございます。最近では、訓練と本人の努力で、いつかは普通の人と同程度の生活やら仕事やらが出来るようになるかも知れないと、養護学校の先生が仰言つてくださるようになってございます。私たちは沼の横手の木洩れ陽の中を抜けて、山頂へのリフトに乗りました。私は山の斜面の彼方を見渡して、あなたのお姿を捜してみました。けれども、あなたのお姿は、もうどこにも見当たりませんでした。山頂からくぬぎ林を少し下り、大きな岩が山肌から突き出ているところまで来て、私はそこに清高を坐らせ、長い時間景色に眺め入っていました。空には雲ひとつなく、目の高さのところで鳶がいつまで

も旋回しつづけていました。はるか遠くの、おそらく日本海に近いのであろうと思われる薄紫色の霞に覆われたあたりに山々が連なり、私はあれが朝日連峰、そこからずっと右の方にぼくと盛りあがって見えているのが鳥海山と清高に教えてやりながら、蔵王の別の斜面を下って行く四角いゴンドラに何度も目を走らせました。ひょっとしたら、あなたがお乗りになってはいないものかと考えてしまうからでした。背後の小道で足音がするたびに、もしやあなたではあるまいかと、恐る恐る振り返ってしまふのでした。清高は鳶を見ては笑い、小さい点のような眼下のゴンドラを見ては笑い、下界のどこから立ち昇ってくる煙を見ては笑っていました。私も子供の声に合わせて笑いながら、いましがた目にした十年振りのあなたの容姿を心に描いていました。なんとお変わりになったことだろうと思いました。そして、いったいなぜ、あなたはこの蔵王にやって来たのであろうかと、そればかり考えつづけていたのでございます。

二時間近く、岩に腰を降ろしていただいましょうか。私たちはやっとその場を離れて、旅館へ帰ることにしました。リフトでドック沼まで下り、またゴンドラのところに帰って来ました。こんどは、ゴンドラの中は私たち親子のふたりきりで、私はそこで改めて、まっ盛りの紅葉を目にしました。全山が紅葉しているのではなく、常緑樹や茶色の葉や、銀杏に似た金色の葉に混じって、真紅の繁みが断続的にゴンドラの両脇に流れ去って行くのでした。それゆえに、朱い葉はいっそう燃えたっているように思えました。何万種もの無尽の色彩の隙間から、ふわりふわりと大きな炎が噴きあがっているような思いに包まれて、私は声もなく、ただ黙って鬱蒼と

した樹木の配色に見入っておりまして。私はふと、何かしら恐いものを見ている心持になっていました。私はそのとき、さまざまのことを考えていたような気がいたします。言葉にすれば、きつと何時間もかかってしまうことを、紅葉がまたひとつまたひとつと目の前をよぎって行くごとに、そのつかの間に、とめどなく絶え間なく考えつづけていたと申しましたら大袈裟でございましょうか。また相変わらず夢みたいなことを言うと、あなたは可笑いになるでしょう。けれども、私はあの烈しい紅葉の色合いに酔ったまま、確かに、何かしら恐いものを、しかもしんと静まった冷たい刃に似たものを、樹木の中の炎に感じたのでございます。あるいは、あなたとのまったく思いがけぬ再会が、私に例の少女じみた空想癖を呼び醒ましていたのかも知れません。

その夜、私は清高と一緒に、旅館の大きな岩風呂の硫黄の湯に入ってから、星を見るために再びダリア園まで登って行きました。旅館の人に教えられた近道を抜け、懐中電灯で足元を照らしながら、誰もいない曲がりくねった坂道を行きました。そんなに歩いたのは、清高にはたぶん生まれて初めてのことだったでしょう。松葉杖を支えている脇の下が痛むらしく、暗闇の中で立ち停まって何度も弱音を吐いていましたが、私がきつい口調で励ますと、思い直して懐中電灯の丸い光に向かって少しずつ進んで行きました。ダリア園の前に辿り着くと私たちは息を弾ませて立ち停まり、夜空を見あげました。ほおっと力が抜けていくような気持ちにさせる、たくさんの星が、手を伸ばせば届いてしまえばかりのところで瞬いていました。ゆるやかな斜

面に造られたダリアの花園には、ただ黒い輪郭とほのかな香りだけがあって、花の色彩は夜の闇に塗りつぶされ、風の音ばかり聞こえてくるのでした。目前にそびえる山々も、ゴンドラ乗り場の建物も、ワイヤーを支えている鉄柱も黒く静まり返って、その上空に天の川が鮮やかに横たわっていました。私たちは花園の真ん中に入って行き、天を見あげたまま上へ上へと歩いて行きました。ダリア園の端まで登ると、小さなベンチがふたつ並んでいましたので、そこに腰を降ろし、山形の駅前で買ったヤッケを着込み、冷たい風になぶられたまま、いつまでも宇宙のきらめきに見入っていたのでした。ああ、それら星々のなんと寂しかったこととでございましょう。そしてそれら星々の果てしない拡がり、なんと途方もなく恐しく感じられたこととでございましょうか。私は、あなたと十年振りに、突然みちのくの山中で再会したということが、なぜかとても悲しい出来事であったように感じられて仕方ありませんでした。いったいなぜそんなことが、悲しいことだったのでしょうか。私は顔をあげて星を眺めつつ、悲しい、悲しいと心の中で呟いてみました。するといつそう悲しさがつのつて来て、十年前のあの事件のことが、スクリーンに映し出されるように甦って来たのでした。

長いお手紙になりそうとでございませう。あなたは、あるいは途中でこの面白くもない手紙を破り捨てておしまいになるかもしれません。ですが、私はそれでも最後まで書いてしまおうつもりでございます。少なくとも、あの事件の最も大きな被害者であった私が（それはお前ではなく、この俺の方だとあなたは仰言るかもしれませんが）、当時、どんなことを考え、どんなふうに

私なりの結論を導き出したのかということを、ありのままにお話しておきたいのでございます。本当は、あなたとお別れするときに、あの十年前に、お話しておくべきでしたが、そうはいいたしませんでした。すでに遠くに過ぎ去った出来事ではございますが、いま改めて書き綴ることにいたしました。

あの日、事件を報せる電話は、明け方の五時にかかってまいりました。二階の寝室で眠っていた私は、お手伝いの育子さんに揺り起こされたのでございます。

「靖明様が、えらいことやそうです」

と育子さんは言いました。その声は震えていて、ただならぬ出来事の襲来を私に感じさせました。私はパジャマの上からカーディガンを羽織って、階段を駆け降りました。電話に出ると、太い落ち着いた声で、こちらは警察だが、あなたは有馬靖明さんとはどういう関係の人間かというようなことを訊かれました。

「家内でございますが」。私は寒さと動揺とで震えそうになる声を押さえて答えました。するとしばらく沈黙があつて、それから事務的な口調で、あなたの御主人と思われる男性が、嵐山の旅館の一室で心中事件を起こした。相手の女性 は死亡したが、御主人はあるいは一命を取りとめるかもしれない。病院で治療を受けているが極めて重体なので、すぐにもお越しいただきたい。そう言つて病院の所在地を教えてくださいました。

「主人は、今夜は京都の八坂神社の近くの旅館に泊まつてはるはずですが……」と私が言います